

みなさんこんにちは!

新任医師の紹介をします



佛坂正幸 (ほとけざか まさゆき) 51歳

【担当科】外科 【出身大学】九州大学 【趣味・特技】読書(歴史小説)
【自己PR】11月から赴任しています。出身は佐賀県の嬉野温泉で、宮崎にきて10年になります。専門は大腸・肛門疾患で、大腸癌、炎症性腸疾患、大腸肛門機能障害などを中心にやってきました。今後は、岩村副院長のもとで様々な外科的疾患について勉強したいと思います。家内は日向市出身で、昨年、男の子が生まれました。かわいくて仕方ありません。何かありましたら、気軽にお声をおかけください。

記念病院 理念

「人間愛」

— 記念病院 基本方針 —

1. 患者様の人権と意思を尊重し、患者様の立場に立った医療の提供
2. 地域の中核的病院として、専門的且つ高度な医療を実践
3. チーム医療を推進し、より良い医療の希求
4. 豊かな人間性を備えた医療人の育成
5. 職員が意欲を持って働ける職場環境



患者の皆様の権利に関する宣言

当院では、患者の皆様の尊厳や人間性が尊重され、パートナーシップを強化し、以下の権利が守られることを宣言します。

1. 良質の医療を受ける権利
患者の皆様は、差別されることなく適切な医療を受ける権利を有します。
2. 選択の自由の権利
患者の皆様は、医師や病院或いは保健サービス施設を自由に選択し、変更することができます。また、いかなる段階においても別の医師の意見を求める権利を有します。
3. 自己決定権
患者の皆様は、自分自身に関わる自由な決定を行う権利を有し、それに必要な情報を得る権利を有します。
4. 意思に反する処置
患者の皆様は、意思に反する診断上の処置或いは治療は、原則的に行いません。
5. 情報に関する権利
患者の皆様は、医療上の自己の情報を得る権利を有します。また、知られずにおく権利と自分に代わって自己の情報の提供を受ける人を選択する権利も有します。
6. 守秘に関する権利
診療の過程で得られた患者の皆様個人の情報は、全て保護されます。
7. 尊厳を得る権利
患者の皆様は、いかなる状態にあっても人格的に扱われ、尊厳をもってその生を全うする権利を有します。

潤和会記念病院 院長 呉屋 朝和

あ と が き

湯たんぽの効果

私は、冬になると湯たんぽを愛用しています。プラスチック製のものでひつじの形でクッション素材のカバーをつけて使っています。寝る前にあらかじめ布団に入れて温めておき、休む時に太ももに挟むのは最高です。

冬の冷えた布団や、冷え性の方には湯たんぽの優しい暖かさは嬉しいですね。安眠には欠かせません。湯たんぽの効果と温め方を知って、効果的な使い方是非活用して見て下さい。

寒いと、どうしても冷えを感じやすい手足の先を温めがちですが、効果的な温め方とは云えず、なかなか体全体は温まりません。湯たんぽでの効果的な温め方は、体幹部に近い部分(お腹やお尻、太もも前面、二の腕の後ろ側など大きな筋肉)を温めることです。この方法なら高い効果が期待できます。大きな筋肉は熱エネルギーを生み出す部分であり、太ももとお尻は、中でも効果的な部分になります。

人間の筋肉の七割は下半身に集中しており、特に膝からお尻の周辺に多くついていると云われています。例えば、太ももの筋肉の大半は前面にあるので、太ももの前面を温めるとより効果的な温め方になります。最初のうちは温かくポカポカと気持ち良いのですが、時間が経過してくると少し汗ばむ状態になってきます。こうなる前に湯たんぽを移動する必要があります。汗で熱が奪われてしまいますから、体を冷やし風邪を引きかねません。それに、長い時間体の同じ場所に触れていると、低温やけどになることもあります。湯たんぽの使用の注意点は、温めながらも、汗ばむ前に移動することです。

湯たんぽは、ちょっとした工夫で上手に効果的に体を温めることが出来ます。エコにも健康のためにも良い湯たんぽを使って寒い冬を快適に過ごしてはいかがでしょうか。

潤 うるおい

2012年 1月1日発行

No. 47



(財)潤和リハビリテーション振興財団
潤和会記念病院

院長 呉屋 朝和
〒880-2112 宮崎市大字小松1119番地
TEL0985-47-5555 FAX0985-47-8558
http://www.junwakai.com

あけましておめでとうございます

潤和会記念病院 院長 呉屋 朝和



あけましておめでとうございます。本年もよろしくお祈り申し上げます。

皆様方にとって、本年も健康でよい年であることをお祈り申し上げます。

我々、医療社会に身を置くものとして、関心が高いのは、2012年度は診療報酬、介護報酬の同時改定の時期であることです。医療と介護の包括的な連携システム、ネットワーク構築が進められていくものと思われまふ。病院と診療所の役割分担、連携強化が構築されつつあります。早期の在宅療養への移行や、在宅医療を担う医療機関との連携強化、看取りまでの医療の充実、医療ニーズが高い人への訪問看護、維持期のリハビリなど、この連携はますます必要かつ重要になっていくものと思われまふ。

病床再編の動きもあります。厚生省の動きとしては、治療の期間に従って、高度急性期、一般急性期、亜急性期、長期療養、とステージに合わせて、病床の再編を図ろうとしているようです。我々の施設でも、新たに区分けされるであろう高度急性期医療と、ICU、SCU などとの関連、一般急性期病床との区分、などを中長期的に考えていく必要があると思われまふ。

現在、厚生省は、診療の平均化、ひいては医療財源の抑制という意図でもって、DPC(1日当たりの包括部分と手術などの出来高を合わせた医療費)病院を診療報酬上、優遇してきていますが、このDPC対象になっている患者数はまだ多くはありません。この診療報酬システムがどうなっていくのか、興味深いものがあります。

少し、話は変わりますが、日本は、環太平洋パートナーシップ(TPP)に参加することが求められています。「平成の開国」と言われ、関税が撤廃

され自由貿易となるようです。グローバルな視点からも、この潮流は避けられないように思われまふ。日本の産業の中でも、メリット、デメリット相半ばという感じがしますが、工業立国である部分は大きなメリットとなり、反対に、農業は痛手が大きいことが予想されています。医療はどうなるかわかりませんが、混合診療や株式会社みたいな形態も導入されるかも知れまふ。おそらく、医療財源の限界を考えると、DPCよりさらに進んだアメリカ版のDRG/PPS(一入院あたりの包括払い)みたいな形態になっていくことが予想されまふ。昔は日本でも医療費を払うのに田畑を売却して費用に充てた時代もありましたが、そういう時代に医療制度が逆行しないためにも、税率や保険料などの、何らかの形で我々の負担増は避けられない時代になってくるようです。

韓国との医学交流にしばしば出席してきていますが、最近ではますます盛んになってきています。参加しているうちに、彼らは新しい医療機器、新しい薬、の導入に関してほとんど欧米と時間差がないということに気づきました。日本では厚生省の権限が強いため、申請してから、許認可まで数年かかります。

動きが遅いと感じまふし、高価になったものを買わされているように思われまふ。TPPに加わることで、何らかのインパクトが生じてくるのではないかと考えられまふ。

先頃のニュースでは、定年65才制度もきまふし、一方では若者に仕事をという声も大きいし、何が可となるか予測はなかなかむずかしい時代ですが、ともあれ、健康で、新しい年を過ごしたいものだと思います。

脳の機能を押し量ることができる機器

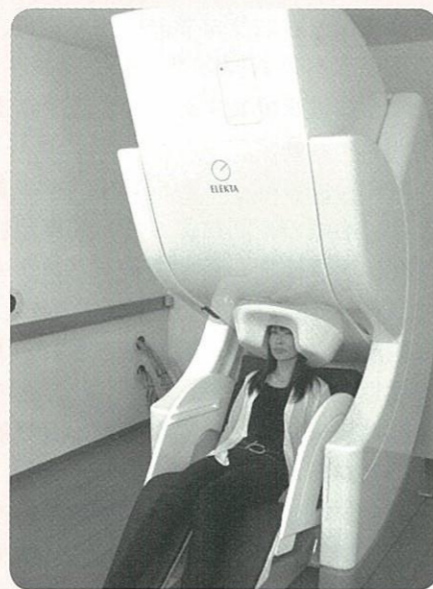
総合リハセンター
リハビリテーション科部長 河野 寛一

昨年6月から脳神経センターに、脳の機能を検査する最新の機器が導入されました。脳磁計と経頭蓋磁気刺激装置です。この二つは主に脳の機能を電気生理学的に検査するものです。これまで放射線部にあった高性能の3TMRIは脳の局所血流の評価ができるので、これで我々は脳の機能解析の為に強力な武器を3つ持ったこととなります。我々人間をはじめとする動物は周囲環境の情報を得て、周囲環境に適応する為に神経系を有しています。神経活動を通じて身体周囲からの情報を得て解析し、そして反応していくというのを生きている間は休むことなく行っています。そういった働きの中核が脳です。脳や神経系の情報のやりとりは細胞や神経回路の電気的な変動で行われます。

人間の脳の細胞や細胞間のシナプスという連絡装置からなる神経回路に電気的な活動が生じると、その部位にとっても弱い磁界の変化が生じます。電気を流してモーターを動かす原理と同じものですが、その強さは比べものにならないほど微弱なものです。磁界の変化は電流と異なって、皮膚や頭蓋骨で邪魔されないの、適切な環境を作ると、頭の表面からその直下の脳局所の磁界の変化を正確に捉えることができます。それはつまりその部分の細胞や神経回路の電気活動を正確に捉えることができるということです。脳磁計は脳や神経回路の電気的な活動によって生じる磁界の変化をとらえることによって、正確に微弱な脳や神経回路の活動を計測する装置です。地球には地球磁場があって、太陽からの放射線など有害な影響をブロックしています。人間の脳の中で生じる磁界の変化は、地球磁場に比べると極々弱いものなので、脳磁計は地球磁場の影響を受けないような特殊な部屋の中においてあります。被検者が忘れて金属の部品が着いたベルトをしたまま装置の中に入ると、それだけでも影響がでて、検査できないほど精密に作られたものです。

経頭蓋磁気刺激装置は脳磁計とは反対に、頭の表面で磁界を変化させることによって、脳内に微弱な電流を起こして、脳細胞や神経回路を刺激する装置です。脳は高度に分化した臓器で、脳の「しわ」の各部分に異なる機能の細胞が集まっています。たとえば前頭葉の一次運動野と呼ばれる部分を適切な強度で刺激すると、指や手を動きを誘発することができます。

こういった装置は神経内科領域で、てんかんやパーキンソン病、認知症など多くの神経疾患の診断に用いられます。我々のリハビリテーション分野では、脳卒中や外傷による脳損傷の評価、あるいは脳卒中からの回復過程の評価などに用いています。脳卒中などで一部の脳機能が壊れると、人間の脳はその壊れた機能を再構築することができます。以前は脳細胞や神経回路は一端壊れると再生しないとされていましたが、実際にリハビリテーションを行うことによって、脳卒中で麻痺した手足の動きが回復してくることは古くから知られていました。MRIや脳磁計、磁気刺激装置を用いて解析すると、脳卒中の麻痺から回復する過程で元来機能のあった部位と少し離れた部分に機能が移っていることが最近わかりました。それがどのように起こってリハビリテーションでどう変わるのかこれから解析して行こうと計画しています。また磁気刺激装置で麻痺の手足を動かすべき脳の部位を刺激してやると、たとえば脳卒中から1年経た人でも、新たに少しずつ麻痺の改善が得られて、リハビリテーションの期間を長くすることができるということもわかってきました。寝たきりで所謂植物状態の人たちの脳機能を評価すると、ご家族や音楽に反応していることも認めることができます。こういった装置を用いた研究や治療は今始まったばかりで、全世界で競争しながら多くの報告が出てきていて、今後の進歩が期待されます。我々もその競争の中にこぎ出して、良い結果を出すように努力してゆきます。



脳磁図システム
(エレクタ社、ニューロマグ)



おせち料理

～おせち料理とは～

「おせち」とはもともと暦上の節句（中国の暦で定められた季節の変わり目で、元日、1月7日、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日）のことを指し、その時に食べられた料理をおせち料理と呼んだそうです。今では一年に一番大切なお正月の料理を「おせち料理」と呼ばれるようになったそうです。正月三が日は主婦を家事から解放するという意味も含め保存が効く食材が中心のものになったといわれているそうです。おせち料理を詰める重箱は“めでたさを重ねる”という意味で縁起をかついでいるので重箱に詰めてだすそうです。基本は四段重ねで上から、一の重、二の重、三の重、与の重と呼びます。四の重の「四」は縁起が悪いので「与」になっているそうです。

おせち料理にはそれぞれに意味が込められています。

○一の重(祝い肴で黒豆、数の子、田作りなど)

- ・黒豆……一年中まめに働き、健康に過ごせようという願いが込められている
- ・数の子……たくさんの卵があることから、子孫繁栄の願いが込められている
- ・田作り……昔は稲を植える時イワシを細かく刻んで灰に混ぜ肥料に使っていたことから五穀豊穡の願いが込められている

○二の重(伊達巻、きんとんのような甘い物中心)

- ・伊達巻……卵を使った料理は子孫繁栄の象徴とされている
- ・きんとん……「金団」と書き、財宝という意味があるそうで、富を得る縁起物とされている

○三の重(魚や海老の焼きもの海の幸など)

- ・海老……腰が曲がるまで丈夫という長寿の願いが込められていて、海老の赤は魔よけの色とも言われている
- ・昆布巻き……「よるこぶ」の語呂合わせから縁起が良い食材とされている

○与の重(野菜類の煮物など山の幸など)

- ・紅白なます……紅白のおめでたい色は水引を表し、紅白の組み合わせは平和を願う縁起物
- ・煮しめ……家族が仲良くいっしょに結ばれるという意味がある

新年を迎えて家族で食べるおせち料理、自分自身何となく食べているおせち料理にはどんな意味や願いが込められているのだろうかと思い調べてみると、今まで知らなかったことがたくさんあり興味深いものでした。意味を理解しながら食事をするのも食事をするうえで大切なことだと思いここで紹介しました。